

視点3

適応指導教室から考える

不登校の子どもたちの居場所

加藤美帆
(大学教員)

学校であって学校ではない場所

もう何年か前に、都内にある不登校の子どもたちの居場所の幾つかを訪れたことがある。学校の統廃合により使われなくなった校舎の中には、不登校の子どもたちの居場所として利用されている所が少なくない。街中に点在するそうした旧校舎の一つに足を踏み入れると、学校として使われていた時には子どもたちの声があふれていたであろう、今では剥離した壁や穴の開いた天井など建物自体の傷みも目につく静かな空間が広がっている。しか

し、内部は丁寧に手入れがなされ、教室の中に置かれた卓球台、一人になれるスペース、机の上の作成途中のジグソーパズルなど、学校のように学校らしくない空間にするための工夫が施されている。

今では民間のフリースクールやフリースペースは珍しくないが、「適応指導教室」といわれる、区や市によって置かれている不登校の子どもたちの居場所もある。「適応指導」とは、ずいぶん物々しい表現だが、退職した元学校の先生たちがスタッフになり、子どもたちが通いやすい、居心地のよい空間にするた

加藤美帆 (かとうみほ)
東京外国語大学准教授。専門は教育社会学。主著は「不登校のポリティクス」(勁草書房 2012年)。

めの手作りの工夫をしながら運営をしている所が多い。しかし、さまざまな理由で子どもたちが続けて通うことが難しかったり、また、スタッフに中学生の勉強を十分に見られる人がいない、在籍している学校と適応指導教室の間の連絡がうまくできないなど、運営しているスタッフの努力だけでは解決できないような課題も多い。区や市の運営する不登校の子どもたちの居場所には、学校を中心に考えられている制度のいわば隙間を埋めるような役割が求められているが、多くの適応指導教室は、安定した運営の難しさに直面している場合も少なくない。

居場所の条件

ところで「居場所」という言葉が独特の意味を持って使われたしたのは、一九八〇年代の半ばに、登校拒否の子どもたちのためのフリースクールが徐々に増え始めたところである。

学校でも家でもない「いどころ」を指すのに最もしつくりくる表現として定着していったことがきっかけのようである。そして今日では、社会の中での居心地の悪さや居所の定まらない不安など、居場所を求める人々のありようは、いっそう多様になっている。「職場に居場所がない」「家に居場所がない」など、どこにも居場所を実感できない人々のすそ野が広がっていることは、学校だけでなく、家族、仕事といったさまざまな場——以前は安定した場といわれていたような所なのだが——にも現れている。

居場所とはどのようなものだろうか。そこが居場所と言えるには、安心感が得られることに加えて、自分が承認される関係性、物理的な空間が必要であるという。^{注1} インターネットの普及した今日では物理的空間はもしかしたら必須の条件ではないかもしれないが、

単に場所があるというだけではなく、自分という存在が周囲から認められていることが、「自分には居場所がある」という実感につながる。それはつまり、自分が周囲から承認される実感のないことが、どこにも居場所がないという感覚になる。誰からも認められない、時には否定され続けながら生きる寄る辺のなさ、不安など、「居場所がない」とは、自らの声はどこにも届かない閉塞した感覚にも通じるのではないか。

声の共有の場

「ああ、ここに仲間がいたと思った」

不登校の子どもを持つ母親たちにインタビュウをした時に、その中の一人の母親が、親同士の自助グループに初めて参加した時のことを振り返って出た言葉である。その人は、子どもが学校に行かなくなった後、自責の葛藤や周囲からの否定的な反応に苦しんだ時期

があった。そうした中で参加したその会で、似た経験を持った他の母親たちに、自らの経験が共有され受け入れられたと感じたことにより、それまで張りつめていた緊張から解放されたという。その瞬間が、自らの居場所に出会った瞬間として、その人に強い印象を残していたのである。

社会の中心から疎外された人々が、弱さや痛みを共有し、声を発する場を持つこと。それは、力を持つてずにいた人々が、その社会での多数派や支配的な価値観に押しつぶされることなく、自らが立つ足場にもなる。誰ともつながっていない感覚から、声を共有する場へ。居場所を見つけるとは、そういうことかもしれない。

子どもの居場所・教師の居場所

先に、適応指導教室が多く、の難しい課題に直面していることに触れたが、それは「子ども

もはすべからく学校に行くもの」という前提できつちりと作り込まれた仕組みの中で、その仕組みからこぼれた子どもたちに対応しようとする故の難しさとも言える。適応指導教室のスタッフ不足や制度上の裏付けの弱さといった問題も、それらに起因をしている。今の社会には、作り込まれた仕組みの隙間を埋める、もしくは隙間を作るような試みが必要になっていくことも多いのではないだろうか。

例えば今日の学校現場の抱えるさまざまな難しい状況の中で、疲弊し休職に至る学校教師は少なくない。不登校の子どもの数よりも休職している教師の数のほうが多いという、驚くデータもある^{まろ}。

教師の置かれた今日の困難な状況について研究をしている知人が、ある会合で、長期休職した先生たちが職場に復帰するための段階的なプログラムとして、学校に復帰する前に適応指導教室のスタッフを経験するのはどう

か、と提案をしたことがあった。思いも寄らない提案に、その場に居合わせた人たちは一様に戸惑うような表情を見せたが、「僕は真剣にそう思っているんですよ」と念を押すようにその人は話していた。いったん居場所をなくした者同士が、自分たちの声を取り戻す、新しい居場所をつくる。もしも実現したら、既存の学校の枠組みを揺さぶるような、新しい試みになるかもしれない。

注

1 住田正樹編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 二〇〇三年

2 保坂亨『学校を休む 児童生徒の欠席と教員の休職』学事出版 二〇〇九年